

第9回 研究部会 報告

1 第8期中核教員研修のまとめ・報告

『主体的な学びを生み出すための課題発見の工夫』

①各校の研究報告

○神石高原町立三和小学校

- ・子どもにとって差し迫った課題（切実な課題）→探求的な学習へつながる
- ・教科の学びがそこで終わるのではなく、それを学ぶことで日々の生活がより良くなると意識する。

○呉市立広南中学校

- ・「挑戦問題」を実施。単元の導入において今の知識では解決できない課題を与える。授業を受けていくうちに、少しずつ知識を取得してわかるようになっていく。

※課題をいきなり自分から見つけるのは無理。まず課題を与えて、それを生徒が課題だと認識させる。

- ・小中一貫校なので全教科で取り組んでいる。生徒の疑問に対する答えは絶対に教えない。自分で解決してこそ、真の力（知識）となる。

○東広島市立西条小学校

- ・子どもが、「なぜ」「すごい」「やってみたい」と、疑問・関心・意欲を持つような課題を与える。

②京都大学 石井英真 教授より

- 「アクティブラーニング」、「コンピテンシー」などいろいろな言葉に惑わされないようにする。

子どもの様子が一番大切である。

- 「課題発見」することが目的でない。教科の授業において「課題共有」というイメージの方があっている。 教師の教えたことを、生徒の学びたいことにする。

- 「課題発見」は導入だけの話しではない。それがつながっていくことが大切。

→思考することの必然性を与える。**意外性**

しかし、今の子どもたちに意外性ばかりで意欲が持続するのは難しい。

→学ぶことで得をする。（今の生き方が少し変わる）ことを考えさせることが大切。**有用性**

- 日常生活から課題を見つけて始まった授業が、教科の内容だけで終わってしまう。そこで学んだことをもう一度、生活へと戻すことが大切。



- 日本の授業は尻すぼみ。初め（導入）は面白いが最後（章末）は何もなく終わってしまう。教科書では巻末資料として面白い教材が多く用意されている。しかし扱われず終わることが多い。